

平成28年度 第1回 宇部市地域自立支援協議会 会議録

日時:平成 28 年 7 月 12 日(火) 18:00~20:05

場所:シルバーふれあいセンター 3階 第3講座室

欠席者:橋本耕司委員、橋本達哉委員、高永甲雅巳委員

出席者:別紙委員名簿から欠席3委員を除く16委員

市 健康福祉部 上村次長

障害福祉課 谷課長、藤原課長補佐、

梶山主査、中村係長

特別支援教育推進室 常西課長補佐

(傍聴者):なし

1 宇部市地域自立支援協議会委員委嘱状交付

2 宇部市地域自立支援協議会について

事務局から、設置の目的及び協議内容について説明

3 宇部市地域自立支援協議会 会長及び副会長の選出について

委員から、事務局一任との意見により、「会長 佐藤委員、副会長 牧委員」を事務局から提案し、全会一致により承認される。

4 議事

(1) 平成 27 年度実績報告

① 平成 27 年度新規事業等の実績報告

(事務局)別添(資料1)に沿って説明

■質疑応答等

●ひきこもりの問題について、宇部市ではどのぐらいいるのか、それを知るための手段はあるのか。その他理解を深めていくには何を見ればよいのか。

(事務局)HPなどには掲載していない。県レベルでの取り組みや取りまとめはあると思うが。いい取り組みをしていただいているので、何らかの形で成果を取りまとめていければと思う。

●今後の議論のテーマとなるのであれば、全体としての大きさ、うまくいっているもの、全体像等もわかれば議論が深まるかと思う。

●国レベルでは、約70万人いると言われている。平成 21 年度にひきこもりに関する事業を国も立ち上げ、精神保健福祉センターにひきこもり支援センターを設置したが、センターがひきこもり対策に特化しているわけではなく、おろそかになっているようだ。

全国的にみると、7割が直営で残りが委託。ただ、ひきこもりに特化した事業は画期的な動きをしている。家族支援だけでなく、アウトリーチ、就労支援についても活動している。

山口県においては、健康福祉センターをサテライトとして展開しており、家族支援を中心にとい

うことで家族教室を開催しているが、毎年参加されるのは2家族程度。家族が相談に来ないとひきこもりは発見できないが参加が少ないのは平日の昼間にしていること、相談したけれど何も解決されないで諦めている等が考えられる。ただ、ひきこもりは知識があってもすぐ解決できるわけではなく、かえって家族関係が希薄になる場合もある。

家族も高齢化しており、身近な市町が窓口になることが国の動きでもあるが、宇部市においては市の事業としてふらっとコミュニティが受託している。

ところでひきこもりは障害者ではないと言われる方がいるが、単に受診していないので障害が明らかにされていないだけで、発達障害者が多い。多くの場合、高校を卒業したら誰からも支援されず、ますますひきこもりとなっていく。まず家族に丁寧に説明し、理解を深めていくことも重要。さまざまな事例が今後出てくると思うので、本協議会などで報告できればと思う。

② 「第4期宇部市障害福祉サービス計画（障害福祉計画）」に係る実績報告

(事務局)別添(資料2)に沿って説明

●計画相談員のレベルについては、いつも気にかかる。計画作成が9割以上ついたということで、今後はプランの質を上げていくためにどう教育していくかを考えないといけない。ケアマネジメントが一番の要。ニーズの抽出において間違えてしまうと、違ったサービスの提供となる。市は、これについてどう力をいれていくのか。1人で150人以上受けている相談員もいるようだが、当然受けている人数を競うわけではなく、レベルを上げていかなければならない。

(事務局)委員のおっしゃるとおりと思う。相談員が多くの相談を抱えているため、一人ひとりについてはおろそかになっているかもしれない。事業所や相談員を増やしていくことも考えていないといけない。

今後は圏域相談事業所と協力しながら、情報交換の場のみとならない、支援の方法の向上も踏まえた、質の高い研修を実施し、人材育成を図りたい。どのようなことが課題で、どのような支援が必要かを、事例も挙げながらしっかり検討できる研修も実施出来ればと思う。

●どうしても相談員が数を取りたがるというのは、質を問われない現状で、運営を考えて数を重視しているのだと思う。今後は圏域相談事業所として人材育成の一端を担うことができればと思う。

③ 相談支援事業の実績報告

(事務局)別添(資料3)に基づき説明

④ 障害者虐待防止法における相談件数について

(事務局)別添(資料4)に基づき説明

■質疑応答等

●通報されたあとのフォロー・ケアを具体的にはどうしているのか。

(事務局)原因をまずつかむことから始める。事実確認を関係者への聞き取り等を踏まえて行い、原因を除去していく。例えば家族と離れたほうがいいのか一緒にいいのか、等。施設内でもしっかりと研修していただく。未然防止も重要で、訪問してサポートしている。

(2) 地域生活支援拠点の整備について

(事務局)別添(資料5)に沿って説明

■質疑応答等

●そもそもの前提として、優先順位はどのようにしているのか。なぜ多機能型のグループホームが一番必要ということになったのか。何が足りて何が足りないのか。

(事務局)市内に障害福祉サービス事業所の数はかなりある。その中で、実際に地域生活を送っていくために何が足りないのかということモデル事業の検討会やアンケート等で出していた結果として拠点整備というご意見となった。

●具体的にグループホームがどのくらい足りないかの数値的なものはあるのか。

(事務局)細かな分析はしていないが、足りないものはサービスの「隙間」であるとの観点から、相談・短期・GHの3つの機能ととらえ、多機能型グループホームという形での提案となっている。

●モデル事業においてアンケートもしているようだが、このアンケートが何を物語っているのかが押さえられていないと感じる。アンケート結果からこの事業を行うというつながりが見えてこない。モデル事業でももう少しアンケートなりを活用できればともったいなく思う。また、現場において感じることは、3障害は均一でなく、例えば精神障害者には利用が困難なものが多いということ。親なき後というのはよく耳にし、実際定年間際の親があわてて相談に来られるケースもある。しかし、親はたとえ知識があっても動けない、不安だけれど動けない何かがある。そこは丁寧に取っ扱っていかねばならないが、この問題については親に視点がいき過ぎで、本人に当たっていない。また、親なき後がショートステイというのは短絡的のような感じがする。

(事務局)報告書は限られた時間の中、今あるものをどうやってつなげようかという感じで作成されたことは否めない。委員がおっしゃるように、これだけではなく、もっと突き詰めないといけない課題もあり、優先的なものもあろうかと思う。また必要に応じて皆様に相談させていただきながら、例えばこれは精神障害者が活用できるのか、という目線からも検討出来ればと思うので、お知恵を貸していただきたい。

●グループホームにおいては、知的・精神ともに入居している。ただ、実際サービスを必要としている人が入居を希望しているかは疑問。させたいのは親だけかもしれない。施設をツールとしては利用してほしいが、それが目的かといえば別と思う。「地域で」という言葉が何回もでるが、グループホームは一か所に集められているようなもの。「在宅」にも目を向けていないのが不思議。ほとんどの障害者は今ある家で暮らしたいと思っている。その希望に対し、どんなサポートがあるのかを検討すべき。その意味で、何でもわかる相談窓口があるのは心強い。

(事務局)3種別全体の対応を考えなければならない。人材育成や困難事例の対応等、いろいろな視点で検討したい。モデル事業の提案に縛られずに構築していくことが必要と考えている。

(3) 障がい等地域支援ブロック会議等の報告

(事務局)別添(資料6)に沿って説明

■質疑応答等

●地域課題への提案の中の、児童対象の体制だが、横のつながりや悩み相談の場を希望する支援員が多いものの、事業所の事情により、どうしても事業所から抜けられず、日中の会議への出席は困難。夜に集まる会合もあるようだが時間の都合さえ合えば、いろいろな支援者、例えば

学校の先生も来られると思う。相談・交流・研修するための検討を行うという意味で、自立支援協議会の下に新たな部会を設置する方法もある。実際に他自治体で事例もある。顔が見える会というのは必要。

(事務局)体制については、いろいろな方法があると思う。ブロック会議が日中に開催するため出席が難しいのであれば、夜開催するブロック会議を設定することも一つの方法。そのときは児童についての協議に特化すると参加しやすいのでは。今後も引き続き検討していきたい。

5 その他

(1) 障害者差別解消法に伴う市の事業について

(事務局)別添(資料7)に沿って説明

■質疑応答等

●障害者差別相談窓口において、実際相談のあった件数は何件か。また、障害者差別解消支援地域協議会に当事者を多く参加させてほしい。差別解消については、啓発がまだまだで、特に民間は全然浸透していない。

(事務局)相談件数は5件。民間への啓発については、少しずつ地道に行っていくしか方法はないと考えている。出前講座を行ったり市広報に掲載したりしているが、なかなか周知まではいかない。あきらめずに啓発を継続していきたい。協議会の委員には当事者もいる。広く意見を吸い上げる意味で、他に各団体等からも意見をいただいて反映できればと思っている。